
『ネギま！』 強いよお兄さん！

猫谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ネギま!』 強いよお兄さん!

【Nコード】

N3395P

【作者名】

猫谷

【あらすじ】

ネギマ原作において世界を救う勇者となる中学生の彼女達。

もしそんな廃スペックな彼女達に兄が居たらどうなったのだろうか？

この物語は作者のそんな妄想から生まれた物語である。

プロローグ

ネギマ原作において世界を救う勇者となる中学生の彼女達。

もしそんな廃スベックな彼女達に兄が居たらどうなったのだろうか？

この物語は作者のそんな妄想から生まれた物語である。

此処は図書館島最深部『竜の間』。

そこには四人の男が居た。

宮崎ゆとり 図書館島にて発見した特殊な力を持つ本を唯一読める存在。本と共に発見された魔剣のサイファーを扱う。

釘宮^{うたげ}宴 本と共に発見された鎖のサイファーを扱う。

那波十鶴なばとく 本と共に発見された石弓のサイファー（改造済み）を扱う。

和泉亜樹あき 本と共に発見された鎖付き鉄球のサイファー（改造済み）を扱う。

【サイファー】

魔力を喰らう異能の宝石。魔力を吸収してその能力を上げる生きた宝石であり、武器に搭載する事で強大な力を発揮する。

計四人の男たち。彼らは名前から分かる通り上から順に宮崎のどか、釘宮円、那波千鶴、和泉亜子の兄である。

そんな彼らは今『竜の間』を前にして最後の休憩を取っていた。

「ようやく此处まで来ましたね」

皆に話しかけるゆとり。

「ああ、長かった。ここまで来るのに六年だ」

答える十鶴。

「そやな。わいらが未来を知ってから、もう六年や」

ひのふのみと指を折って数える亜樹。

「ほんと月日が経つのは速えよな」

楽しそつに笑って答えるは宴。

「まあ、それも今日で終わります」

「ああ」

「そやな」

「おうよ」

「それでは、十分に休んだことですし、そろそろ行きましょうか」

男たちは立ち上がり、『竜の間』の扉を開く。

そこはゲームという所の『ラスボスの間』。

はたして其処には何が待っているのだろうか。

それとこの四人、裏の技術 - - 魔法と気 - - を何一つ知らない完璧な一般人である。

第一話 v・s・ドラゴン

彼らは竜の間に通じる最後の扉を開く。ここまで様々な冒険があった。

モンスターに負けることは無かったけれど、罠に嵌まり最初から潜り直すこと367回。

行く手を阻むモンスターを倒し、入る度に仕掛けの変わる罠に嵌まり続けて、最終的に何処に仕掛けて有るのか分かるようになってしまったり、時には断腸の思いで妹の誘いを断った。

苦節六年。

終に、この闘いに終止符が討たれる時が来た。

ギイイイ

地下に造られた巨大な空間に、扉が開く音が静かに響く。そこは一本の樹の根元だった。地下をくりぬくようにして、人工的に造られた巨大な空間が広がっていた。中に居たのは一匹の巨大なドラゴ

ンだった。

ギャオオオオオ!!!

ドラゴンの、他の生命を圧倒するかのような雄叫びが巨大な空間に響く。弱者ならその雄叫びを耳にするだけで生きる氣力を喪失しがたがたと震え、喰われるのを待つばかりとなるような雄叫びだった。

それは、まるで彼らに掛かって来いとも言っているかのような雄叫びだった。

そんな雄叫びが響く。それでも、彼らは平然としている。

彼らがこれくらいで怯えることはない。

彼らには頼れる仲間が、信じられる相棒が、護ると決めた大切な人が居る。

こんな所で負ける事は出来なかった。

「一対の翼に二本の後ろ足。ワイバーン・・・ですかね」

ゆとりは冷静にドラゴンを見て、特徴を捉える。その頭の中ではどうやって倒すのか、何通りもの考えが頭の中を飛び交っていることだろう。

「あんなもントカゲと変わらんだろ。それに、怒った妹に比べれば可愛いものだ」

十鶴は普段と同じ調子で石弓から銃へと改造された紅く輝くサイファーを構え、ワイバーンを狙う。

「どのみち邪魔するなら倒すだけや」

不適に笑い、巨大な鎖付き鉄球 全長一m八十cm から扱いやすく改造された蒼く輝く鎖付きフレイルのサイファー
ボーリングの球ほどの大きさ を構える亜樹。

「^{はりつけ}磔にしてやるうか」

怖い事を言う宴。こちらも紅く輝く鎖のサイファ 鎖の先に
五十cmほどの釘が付けられている を構え、戦闘態勢へと移
る。

ギャオオオオオオ！！

宙に舞い上がり、戦闘態勢へと移るワイバーン。その口からは炎が漏れ出し、翼の一振りは地に竜巻を生み出した。

彼らの戦いが始まった。

十鶴が銃を構えると、銃身の先に紅い光が集まる。その光はすぐに大きくなり、膨れ上がる。そして、弾けた。

弾けた紅の光は十二の光弾に変わり、一時の方向から十二時の方向までばらばらに分かれ、ワイバーンを襲う。

ワイバーンはドラゴンだ。あらゆる生命の頂点に立つドラゴンである。たかが十二の光弾で殺れるような、生き物ではない。

けれど、ワイバーンは長い間、この『竜の間』で門番をやっていた。かつて、自由に空を飛び、日々の糧を奪い合った、野生の時代、弱肉強食の世界から長いこと離れていた竜は以前に比べ、格段に戦闘能力が落ちていた。

ワイバーンは光弾を避ける。一つ、二つ、三つと避け続ける。そして残りの九つの光弾を避けきれず、捉われた。

翼をもがれたワイバーンは地に落ちる。何とか立ち上がろうと、もがくが左の翼を失ったワイバーンは酷くバランスが悪く、立ち上がる事は困難だった。

その瞳に殺意の炎を宿したワイバーンは立ち上がろうとする。立ち上がる寸前、空から降ってきた鎖で繋がった釘が、ワイバーンを地面に磔にしなれば、立ち上がれていた事だろう。

ワイバーンは地面に磔られた。鎖が体中に巻きつき、締め付けて、地に刺さった釘が立ち上がる事を良しとしない。宴が宣言通りにワイバーンを磔にしたのだ。それでも諦めず、屈することを良しとしないワイバーンは立ち上がろうとする。

この戦いが一体一だったならワイバーンにも勝機は有ったのだろう。けれど現実是非情だ。この戦いは四対一。一人の攻撃を避けら

れても次の攻撃が待っており、反撃する隙が無かった。私刑の如き有様だった。

立ち上がろうとするワイバーンに、近寄る影が一つ。亜樹は地に抑え付けられたワイバーンの頭部に、フレイルが届く位置まで近づき、全力で縦に振り下ろした。ワイバーンが頭が地にめり込む。殴りつけられた衝撃で頭部は凹み、ワイバーンは痛みに悶えた。

この攻撃はワイバーンが倒れるまで続いた。ワイバーンが意識を失うまで、何度も何度も振り下ろされた。

勝負は決した。

「ミケーーーーー!!!」

遠くから叫び声が微かに響いた。

ちなみに何もすることがなく、出番もなく、終わってしまったゆとりだが、彼にも出番は有る。

ワイバーンを倒した一行はワイバーンを治療する。彼らは魔王を倒すことが目的であって、無駄な殺傷は好まないのだ。治療により、なんとか一命を取留めたワイバーン。ゆとりは彼？が目覚めた後、邪魔されることないように薬を飲ませておく。その薬の名前はメタモルフォーゼ。その身をカエルへと変えてしまう恐ろしい薬だ。

こうしてワイバーンを完全に無力化した一行は一路魔王の元へと向かう。

続く！

第二話 魔王 心の叫び

遂に図書館島最奥の【竜の間】に辿り付き、ドラゴンを倒した彼ら。

彼らは遂に事の元凶である魔王と対峙する。

彼らはドラゴンを倒し、先に進む。疲れはほとんどない。むしろ程よく体が温まって戦闘を行うのに最適な状態だった。

遂に、彼らの前に魔王が現れた。魔王は体をすっぽりと覆うローブを着て空に浮いていた。

「ああ、ここまで来てしまったのですね」

魔王は彼らに語りかける。

「命を粗末にするとは愚かしい限りです。此処に来なければ死ぬ事もなかったでしょうに」

「はっ、寝言は寝てから言えや、魔王。お前さんは此処でわいらに倒されるんや」

彼らは各々の武器を構える。先頭には近距離戦を得意とする亜樹がフレイルを構えて立つ。亜樹の背後にはゆとりが、左右に十鶴と宴が立つ。ちょうど菱形になるような陣形だ。

「いいえ。そんなことにはなりませんよ。死ぬのは貴方たちなので
すから」

魔王も武器である杖を構える。魔力を十分に込められた、一目で
強力な武器だと分かる代物だった。

正に一触即発の空気。空間が彼らの威圧で軋みを上げる。いつ殺
し合いの火蓋が切り落とされても不思議ではなかった。

先手を仕掛けたのは十鶴。魔王は様子見に徹している。十鶴は銃
のサイファー使い。その間合いは広範囲に及ぶ。光弾の当る範囲、
その全てが彼の間合いだった。

魔王との距離は十メートル程。彼が放った十の光弾は瞬く間に、
その距離をゼロとして魔王の体に突き刺さった。か、に思われた。

光弾は魔王の体の前。突き出された杖の前方に展開されたバリア
のような物に阻まれた。けれど、サイファーは魔力を喰らい成長す
る生きた武器だった。被弾した箇所から魔力を喰いだし、瞬く間に
バリアを喰い尽し、消滅させた。

バリアは破壊され、一度粉々に砕け散り、彼らの視界を遮る。

それと同時にバリアの修復が始まった。その修復の速度はとても
速い。完璧に修復するのに一秒も必要としないだろう。けれど、宴
の釘はそれよりも速かった。宴は十鶴が光弾を放った、その瞬間に
駆け出し、光弾の後を追うように釘を放つ。釘はバリアが修復され
る前に突破し、魔王を貫く。

「やったか!？」

煙が晴れる。そこには確かに人影が見えた。

「ちっ！ まだ死んじやいない！ 警戒を怠るなよ！」

十鶴の声に警戒を強め、彼らは煙が晴れるのを待つ。

S i d e 魔王 心の叫び

「ああ、ここまで来てしまったのですね」

何で一般人が此処まで来れるんですか!？

「命を粗末にするとは愚かしい限りです。此処に来なければ死ぬ事もなかったでしょうに」

ああ、頭が痛い。そして、あの時の自分を殴りたい。なんであんな事をしてしまったんだでしょう。

彼……亜樹……が喋る。

「はっ、寝言は寝てから言えや、魔王。お前さんは此処でわいらに倒されるんや」

覚悟を決めた者の顔で私に対峙する彼ら。その顔は自信に満ち溢れていて誇り高かった。

・・・もしここで私が、「あれは私のちょっとした冗談でした」って言ったら見逃してくれますかね？

彼らが各々の武器を構えるのに合わせて私も杖を構える。

「いいえ。そんなことにはなりませんよ。死ぬのは貴方たちなのですから」

というか、何故貴方たちはそんな代物を持っているのですか！？

誰にも封印が解けず、解読不能と諦められた魔導書。それと共に封じられていた武器。厳重に絶対に解けないように、封印されていた筈なのに何で持つてるんです！？

貴方たちを選んだというのですか！？

・・・ああ、私は今日此処で死ぬんですね。

ミケ・・・私も今から貴方の後を追います。

・・・戦闘中・・・

黒い髪の彼の放った釘が、私の魔法障壁を突破し、迫る。

これは・・・死にますね。完璧に直撃コースです。頭が『パンッ！』ってなりますね。

て言うか、貴方たち強すぎですよ。

・・・約束、守れなくて申し訳ありません、ナギ。

学園長、後は任せます。

さよなら自分。

さよなら皆。

・・・あれ？ 死んでない？ まだ生きてる？

「ふう。どうやら間に合ったようだね」

た、高畑君！

続く！

第三話 その頃、地上では・・・（前書き）

感想ありがとうございます。めっちゃ嬉しかったです。返信できなくて済みません。

第三話 その頃、地上では……

この日、麻帆良学園は年に一度の学園祭で、一際賑わっていた。

学園には出店やパレード、見世物が休むことなく溢れ、大勢の人で賑わっていた。

今年の学園祭も例年通りの賑わいを見せ、大変好ましいものだった。

しかし、最終日、最後のイベントとして麻帆良大学主導で大イベント『火星からの侵略者』が執り行われた。

学園に存在する全ての人間を巻き込んだ大イベントだった。

[illegible]

「学園長！ 何故助けを送らないのですか！？」

麻帆良学園女子中等部に存在する学園長室に一人の男の声が響く。

男――タカミチ・Ｔ・高畑――は眼鏡をかけ、鍛えられた肉体を持つ、何処か草臥れた印象を与える男だった。

その姿は非常にボロボロで疲労困憊と言った有様だ。

おそらくは立っているだけで限界なのだろう。

今にも倒れそうな様子だった。

「今、助けを送る訳にはいかんのじゃ」

「今送らないで、何時送ると言^いうのですか!？」

「儂らの負けが決まった後じゃ。酷な事じゃが、アルビレオ殿が彼らに因って討ち取られれば、この騒動は丸く収まる。この戦いが終わるには、彼が犠牲に為るか、儂ら魔法使いが負けるか、どちらかしかない。それならば、アルビレオ殿に倒れてもらった方が被害が少ない。分かるじゃろ？」

その事を頭では理解しているが、感状がそれを認めたくない邪魔をするのか、タカミチは拳を強く握り締めて行き場の無い感情を封じ込める。

拳が今の状況を切実に物語っていた。

「学園長！」

学園長室の扉が荒々しく開かれる。

半ば蹴り跳ばすように、眼鏡をかけた一人の男――瀬流彦――が入ってきた。

「魔法使いの過半数が無効化されました！ 奴らが此処に辿り着くまで、もはや一刻の猶予も有りません！ どうか御決断を！」

「時間切れ・・・じゃな。もはや、彼一人の問題では済ませられんか」

力無く呟いた学園長。

「それでは!？」

「儂らの負けじゃよ。白旗を挙げよ。全面降伏じゃ」

「しかし、それでは!」

「構わん。この決断の責任は儂が取る。皆は責を問われわせんだらう。この状況を予想できなかった儂が責任を取るのが道理じゃ」

「くっ! わ、分かりました。それでは失礼します!」

学園長室を飛び出す。

扉は開いたらままで、扉を閉める僅かな時間すらも惜しいという有り様だった。

「高畑君。アルビレオ殿を助けに行っておくれ。負けが決まった以上、無駄な犠牲を出す必要はない」

「分かりました。高畑タカミチ、アルビレオ・イマの救助に向かい

ます」

「まずは説得するのじゃ。彼らとて悪人ではない。降伏したと、戦いは終わりじゃと伝えれば、矛を納めてくれるはずじゃ」

「ええ、それでは後は任せます」

「うむ、こちらは任せよ。・・・君も限界なのじゃから、あまり無理はするでないぞ」

「はは、ここで無理をしないで何時するって言つんですか？」

「むっ」

唸る学園長。

彼に、これ以上何を言っても無駄なのだった。

「大丈夫です。必ず生きて戻ってきますから」

彼は見ていて、やせ我慢だと一目で分かっってしまうような笑顔を

浮かべ、部屋を跳びだした。

僅かに回復した気の力を持って、強化された身体能力をフルに使い、彼は学園を駆け、一路図書館島地下を目指す。

彼を見送った学園長は、思う。

あやつは苦勞を背負い込みすぎる、と。

どこまでも苦勞人な彼を思い、無事に帰ってくれば一週間ほどの休暇を無理にでも与えよう、と思う。

窓から眼下を見下ろし呟く。

「儂らは、どこで間違えたんじやろうな」

眼下には荒れた学園が広がっていた。

至る所に戦闘の痕が見える。

かつての綺麗な町並みは消え、機械の残骸と魔法により傷つけら

れた建物が広がっていた。

「一般人に死傷者が出なかったのが唯一の救いかの」

自分たち魔法使いのして来た事を考える。

「いや、儂ら魔法使いの言う事ではないか」

麻帆良学園を拠点とする関東魔法使い支部の敗北が決定した瞬間だった。

第四話 戦いの終わり

「ふう、どうやら間に合ったようだね」

彼らが魔王を倒したと思った時、彼らの前に現れ、魔王を救ったのは何処か草臥れた印象を与える一人の男だった。

「そのボロボロな体で、よく此処まで来れましたね。高畑先生」

彼がこの場に現れるのも想定内の事なのか、冷静に対処する彼ら。

タカミチは先ほどの釘を受け止めた事で力を使い果たしたのか、片膝を地に突いている。

タカミチは、すでに口を開くことも限界だろうに言う。

「僕たちは降伏する。戦いは終わったんだ。どうか矛を収めてもらえないだろうか」

「ふむ。本当ですか？ こう言うては何ですが、貴方たちが降参するとは思えません」

タカミチの言葉を疑う彼ら。

タカミチは魔王に味方する者だが、普段は麻帆良の地に住む人々を守る良い教師だった。

例え敵だったとしても、敬意を払うに値する人物だった。

けれど、彼らはつい先ほどまで、死闘を繰り広げていたのだ。

タカミチの言葉だとしても、すぐに信じる事はできなかった。

「信じてはもらえないかな」

「敵の言葉を信じて戦いを止める^やのは、無理な事でしょう？」

戦いはどちらかが倒れるまで終わらない、と彼らは戦いを再開させる。

『P i i i i i i i i i i』

彼らの緊張が大気に満ち、タカミチがやはり無理だったかと思っ
た、その時彼らの間に満ちた空気を引き裂くように、機械的な音が
響いた。

「失礼」

ゆとりが携帯を懐から取り出す。

『長谷川 千雨』

画面にはそう表示されていた。

「ゆとりです」

「生きてるか？」

「当たり前です。千雨ちゃんこそ怪我してはいないでしょうね？」

「もちろん。・・・先輩、魔王軍は降伏したよ。私たちの勝ちだ。
それと、首領が『もう戦いは終わりだから命までは奪^とらなくていい
ヨ』だとさ」

「そう・・・ですか。分かりました。魔王と高畑先生、両名を拘束した後、連れて行きます」

「OK。伝えとく」

「それでは」

「ん。地上で待ってるよ」

『P.i』

「何だつて？」

十鶴が代表して聞く。

「本当に降伏したみたいです。二人を拘束して首領の所まで連れて行きます。宴、二人を絶対に逃げられないように、縛ってください。二人は抵抗しないように」

「それで、この戦いが終わるなら安いものだよ」

その言葉を最後にタカミチは崩れ落ちる。

とうに限界まで、力を使い果たしていたのだ。

ここまで倒れなかったのは、この戦いを終わらせるといふ使命感で、倒れる体を無理やりに支えていただけに過ぎなかった。

「ああ、分かった」

宴が釘と鎖を両手に持ち、言った。

釘で両手を、後ろ手に縫い付けてから、鎖で雁字搦めに縛り、簀巻きにする。

魔王と高畑、二人に逃げられないようにするには、そうするしかないかった。

「それでは地上に戻ります」

- - - - -

- - - - -

地上にて

「そんな馬鹿な！　だったら俺たちは何の為に戦ったと言っんだ！」

「すみません。まさかあれがこの騒動の原因になるとは思っていませんでした」

「魔法だと！」

「そうじゃ我らは魔王軍ではない。魔法使いじゃ」

「ならば、この预言書に記された魔王は何処に居ると言っんだ！」

「協力するのじゃ。こんな未来、我らとて認められん！」

続く！

第四話 戦いの終わり（後書き）

感想ありがとうございます。返信はした方が良いでしょうか？
迷惑と
かわれたりってしませんかね？

第五話 首領

戦いの理由（前書き）

これでシリアス？は終わりです。次回からは彼らが魔王と戦った理由編。昔の話。

第五話 首領

戦いの理由

麻帆良において、侵入者との戦いた人は、一体どうなるのだろうか？

魔法の犠牲 になっ

答えは 忘れられる、だ。

首領の戦う理由

首領は昔、荒んでいた。

目に映る全てのものを爆破してやりたい、そう常々思っていた。

幸せそうな人を見れば憎いと思い、楽しそうな人間を見れば羨んだ。

この時代に生きる人間が羨ましかった。

この時代に生きる人間が憎かった。

こんな時代に生きたかった、そう思った。

そんな首領は何時しか変わっていた。

何時も、何時も憎いと思っていた光景を見ても、憎いと思えなくなっただ。

何時も、何時も羨ましいと思っていた光景を見ても、羨ましいと思わなくなった。

彼らを救ってみせよう、そう思えた。

そんな時、自分の隣には彼女が居た。

大切だった筈の彼女が居た。

幸せだった。

けれど、そんな幸せも長くは続かなかった。

” 麻帆良において、侵入者との戦った人は、一体どうなるのだろうか？ ”

魔法の犠牲

にな

麻帆良学園は魔法使いの拠点である。

麻帆良学園は世界樹を有する。

麻帆良学園は狙われている。

狙われ続けた。

果たしてその間、魔法に関わりのない一般人が犠牲になった事はないのだろうか？

答えは”有る”だ。

犠牲になった人は少ない。

けれど、確かに居たのだ。

記憶から消されてしまった人だけど、其処には確かに存在したのだ。

麻帆良学園に警察は居ない。

死因を捜査されてはいけないから。

麻帆良学園の侵入者に殺されたなら、例外なく通常の死因では有り得ない。

魔法で殺されれば死因は不明。

悪魔に殺されれば遺体は残らない。

遺体を見せることはできず、調べられる訳にも行かない。

だから、警察は居ない。

魔法使いにとっては、居ない方が得だから。

他人の記憶を奪うことは魔法使いの得意分野だ。

魔法を知られば、知った者の記憶を消して、無かったことにする。

そして、それは魔法の犠牲になった者にしても同様だった。

彼女は小学4年生の時、悪魔に喰われた。

麻帆良を狙う侵入者の召喚した悪魔だった。

運悪く出逢った、出逢ってしまった彼女は口封じの為、殺され、喰われた。

その遺体はほとんどが残らず、かろうじて現場に落ちていた鞆の中の学生証から名前が判断された。

そして、この事は一般人に説明できることはなかった。

説明したならば、警察やマスコミが動くだろう。

だから、魔法使いはこれ迄通りの対応をした。

学園結界の力を強め、他人の記憶を歪め、初めから居なかったことにしたのだ。

幸いと言っても良いのか、彼女は孤児だった為、親は居らず、記憶を奪う作業はスムーズに進んだ。

彼女の行方を気にする者は、その全てが真帆良の中に存在していたから。

けれど、学園結界の効きが弱い者には、効かなかった。

当時、彼女と仲の良かった一人の女の子は魔法を使えなかったけれども、魔法の存在を知っていたから、完全に忘れることはなかった。

もう一人の、同じクラスの女の子は恐怖した。

ある日、学校に行くとクラスメイトが初めから居なかった事になっていたのだ。

その子と仲の良かった友人も、先生も、そんな子は初めから居なかったと言う。

学園には来ていない、と。

彼女は恐怖した。

それはおかしい、と。

けれど、彼女がそれを指摘する事は無い。

無駄だと知っているから。

それはおかしいと言って、苛められた時代があった。

此処では彼女が異分子で、おかしい事をおかしいと思わない彼らが正しいのだった。

彼女は限界は限界を迎えた。

そして、仲の良かった子は仇討ちを決め、気づいた子は心が壊れる寸前まで追い詰められた。

そして今、彼女の仇討ちが終わった。

犠牲者を一人も出さずに、真の目的を一人を除いて誰に知られることもなく、仇討ちは完遂された。

本当は魔法使いに犠牲者を出したかったけど、きっと彼女はそれを望まないだろうから。

これは大切な人を奪われ、大切な記憶までも、奪われた一人の女の子のわがまま。

こうして、彼女の本来の目的とは違う、彼女のわがままによる戦いは終わりを迎えたのだった。

戦いが終わって

帰り道、超は夕焼けに照らされ、綺麗に染まった空を見上げて思う。

（仇は獲ったネ、沙夜）

夕焼けを見上げて、思うは亡き親友への言葉。

「本当は貴女の事、大好きだったネ」

語るはもう伝えられない心中。

（私は貴女に会えて幸せだったヨ。貴女と出会えた事は、私の生涯で初めての幸せだった。失ってから気づくなんて、馬鹿みたいネ）

言いたかった、言えなかった事も今なら言える。

（どうかお空の上で私を見守っていてほしいネ。そう遠くない内に迎えに行くから・・・いや、それは無理だったアルネ）

貴女の次の生が幸せで有って欲しい、そう思う。

夕陽の中に沙夜の笑顔が見えた気がした。

「ばいばい、・・・沙夜」

超の目に一筋の涙が流れる。

そんな超を見て傍らに控える少女は言う。

「これで良かったんですか？」

傍らに控える少女は問う。

これで良かったのか、と。

これで貴方の気は済むのですか、と。

「これで良いアルネ。それに、きっと沙夜は犠牲者が出る事は望まないネ。これは私のわがままアルヨ」

そう言っつて、超は涙を拭い、笑う。

「此処までやって変わらなかったらどうするんです？」

傍らに控える少女は、再度問う。

貴方が我慢して耐えたのに、彼らが変わらなかったらどうするの
か、と。

「決まってるヨ。もし次が有るなら・・・完膚なきまでに叩き潰す。
それだけの事ネ」

その顔は笑っていながらも、何処か狂気を感じられる物騒な笑顔だった。

S i d e 幽霊になった少女

私が死んだあの日から、気づいたら幽霊として、二度目の生を受けていました。

「本当は貴女の事、大好きだったネ」

超さん。

そんなことを言わないでください！

成仏しちゃいます！

ああ、私の未練が！

私の未練。

超さんと両想いになるという未練が叶えられて成仏しちゃう！

生きるエネルギーが減少していく！

このままでは、成仏しちゃう！

何とかしなくては！

ちっ・ちっ・ちっ・ちっ・ポーン

思い付きました！

私が消えそうになっているのは、生きるエネルギーである未練が足りないからです！

ならば如何すれば良いか？

簡単です。

新たな未練を作り出し、それを糧に生きながらえるのです。

そう、私の今生まれた新たな未練。

超さんの体が欲しい（性的な意味で）。

おっ おお おお おお！

み・な・ぎ・っ・て・き・た！

あ、危なかった。

危うく成仏するところでした。

しかし、両想いだったんですね

これは何としても体を手に入れなくてはなりません。

そして、・・・ぐへへへ。

だらしなく弛み、よだれを垂らした、乙女として見せてはいけない表情を見せる沙夜がそこには居た

体が必要です。

誰か創ってくれる人を見つけなくては。

待っててください、超さん。

絶対に、貴方の貞操は私が貰います！

超には忘れていことがある。

学園結界の力によって忘れた記憶。

彼女の不幸はこの事を忘れた事だろう。

彼女と彼女の関係は、親友である前に捕食者と被食者（性的な意味で）だったのだ。

第五話 首領

戦いの理由（後書き）

原作設定改変

超・鈴音

未来からやって来たのが7歳の時。初期はずいぶんと荒れていた。
相坂さよ〃>相坂沙夜

3 - Aと同年代に生まれる。孤児。外面は百合。内面も百合。

第六話 原因

時は西暦1996年。

麻帆良学園図書館島にて、一通の手紙が見つかった。

事の発端となった始まりの文書である。

『我、此処に学園の真実を記す。』

私は真実を知ってしまった。単刀直入に言おう。この学園、麻帆良には魔王が封じられている。そして何時の日か、この封印は解け、魔王は放たれてしまうのだ。

私はもう駄目だ。奴らに、魔王の部下に気づかれてしまった。

君は疑問に思った事は無いか？ 真帆良にそびえる巨大な世界樹の存在を。あれは魔王を封じる楔なのだ。だから、一般人には、知覚できないように特殊な力場を発生させ、発見される事を防いでいる。

そして、これは調べて分かった事だが、学園長は人間ではない。かつて異世界に存在した魔王の側近だった男だ。これは一目見れば分かるはずだ。あの頭は人間ではない。彼はすでに着々とかつての魔王の部下を呼び集め、妙な会合を世界樹の前で行っている。

如何やらもう時間が無いようだ。この書を読んだ君に後を託す。

この巨大な図書館に、この書を隠そう。何時の日か魔王の封印が解かれる、その前に発見されることを願って。

我、ここに学園の真実を記す。

” 何時の日か魔王を倒す者が現れる事を願って ”

クウネル・サンダース
『

第七話 原因その2

私の名は……いや、名を記すことはやめよう。私のかつての名を知る者は、もう存在しない。ならば、名を記す事に価値はないのだから。

私はかつて世界を九割九分九厘、亡ぼした者である。私の企みは、後一步で世界を亡ぼす所までいったが、最後の最期、勇気有る者たちの手によって、阻まれた。阻んでくれた。

死によつて狂気から解放された今では、その行いを後悔している。どうして私が前世の記憶を持ったまま、生まれてきたかは分からない。けれど、償う機会を得られたのだから、この生命未来を紡ぐ為に使おう。

既に償う相手は居らず、償う世界も存在しない。私が償う者が居た時代は世界は、あの時終わったのだ。そして、今の世界は私の魔の手によつて亡びた世界を、再生させた者が一から創り上げた世界。私はこの世界を愛しく思っている。だが、彼らが愛した世界に亡びが訪れようとしている。

人よ。人よ。我が企みから世界を救った者の、愛しき子らよ。その血を受け継ぐ者たちよ。我が生命の全てを使い、予言と力を残す。どうか救ってくれ。

世界に二度大きな戦争が起きる。人が沢山死ぬ。未曾有の被害が出るだろう。しかし、それは滅びへの序曲に過ぎない。二度の世界

大戦の後、世界は仮初めの平和を得るだろう。尊い平和だ。数え切れないほどの人の命と努力。血と汗と骨を積み上げて、ようやく得られた平和。しかし、その後、^{のち}世界は侵略される。三度目の世界大戦だ。此度の大戦は規模が違う。世界と世界の覇権を掛けた争いだ。互いに退くことはできない大戦争。血で血を洗う闘争の時代が幕を上げる。

黒き闇の王子。光から闇に堕ちてしまった王子。闇を纏い全てを奪う。雷を持って全てを撃ち破り、闇を持って全てを吸収する。その身を護るは幾多の従者。それが率いるは魔法使い。歪んだ正義を持って、力を振るうだろう。奴等こそが侵略者。

どうか奴等を止めてくれ。その為の力を託す。

この書を読みし者よ。理不尽な物言いだとは解っている。

だが、頼む。私の頼みはそなたから、平和な日常を奪う事だろう。だが、どうか、頼む。

世界を救ってくれ。

未来を紡いでくれ。

第七話 原因その2（後書き）

クロス オーデインスフィア。

予言を記したのは、転生したバレンタイン王。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3395p/>

『ネギま！』 強いよお兄さん！

2011年2月11日13時31分発行